

東大物理工学科 2013

21B00817 鈴木泰雅,¹

第一問

[1]

連立方程式を解くことによって

$$\mathbf{r}_2 = \mathbf{R} + \frac{m_1}{m_1 + m_2} \mathbf{r}, \quad \mathbf{r}_1 = \mathbf{R} - \frac{m_2}{m_1 + m_2} \mathbf{r} \quad (1)$$

よって、これらを代入することによって、

$$\mathcal{L} = \frac{1}{2}(m_1 + m_2)\dot{\mathbf{R}}^2 + \frac{1}{2} \left(\frac{m_1 m_2}{m_1 + m_2} \right) \dot{\mathbf{r}}^2 - U(\mathbf{r}) \quad (2)$$

となる。よって示せた。

[2]

$$\dot{\mathbf{r}}^2 = (\dot{r} \cos \phi - r \sin \phi \dot{\phi})^2 + (\dot{r} \sin \phi + r \cos \phi \dot{\phi})^2 = \dot{r}^2 + r^2 \dot{\phi}^2 \quad (3)$$

であるため示せた。

[3]

r 成分のラグランジュ方程式より

$$\mu \ddot{r} = \frac{\partial}{\partial r} (\mu r \dot{\phi}^2 - U(r)) \quad (4)$$

であり、

$$\frac{d}{dr} (\mu r^2 \dot{\phi}^2) = \frac{\partial}{\partial r} (\mu r^2 \dot{\phi}^2) + \frac{\partial}{\partial \dot{\phi}} (\mu r^2 \dot{\phi}^2) \frac{d\dot{\phi}}{dr} \quad (5)$$

$$= 2\mu r \dot{\phi}^2 - 4\mu r \dot{\phi}^2 = -2\mu r \dot{\phi}^2 \quad (6)$$

$$= -\frac{\partial}{\partial r} (\mu r^2 \dot{\phi}^2) \quad (7)$$

であるため、

$$\mu \ddot{r} = -\frac{d}{dr} (\mu r \dot{\phi}^2 + U(r)) = -\frac{d}{dr} \left(\frac{1}{2} \frac{l^2}{\mu r^2} + U(r) \right) \quad (8)$$

この物理的な意味としては大きなポテンシャル (一般化したポテンシャル) と見なすことができ、第一項は遠心力によるポテンシャル、第二項は外力によるポテンシャルである。

[4]

両辺に \dot{r} を書けると

$$\mu \dot{r} \ddot{r} = -\frac{d}{dr} \frac{dr}{dt} \left(\frac{1}{2} \frac{l^2}{\mu r^2} + U(r) \right) = -\frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} \frac{l^2}{\mu r^2} + U(r) \right) \quad (9)$$

であり、左辺は

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} \mu r^2 \right) = -\frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} \frac{l^2}{\mu r^2} + U(r) \right) \quad (10)$$

より確かにエネルギー保存が実現している。

[5]

まず \mathbf{l} と垂直であることを示す．そもそも $\mathbf{r}, \dot{\mathbf{r}}$ は xy 平面上での運動であったため z 成分も持たない．よって自明に垂直である．また,

$$\dot{\mathbf{r}} = (\dot{r} \cos \phi - r \dot{\phi} \sin \phi) \mathbf{e}_x + (\dot{r} \sin \phi + r \dot{\phi} \cos \phi) \mathbf{e}_y \quad (11)$$

であり, $\mathbf{l} = l \mathbf{e}_z$ であるため,

$$\dot{\mathbf{r}} \times \mathbf{l} = l (\dot{r} \cos \phi - r \dot{\phi} \sin \phi) (-\mathbf{e}_y) + l (\dot{r} \sin \phi + r \dot{\phi} \cos \phi) \mathbf{e}_x \quad (12)$$

であるため,

$$\mu (\dot{\mathbf{r}} \times \mathbf{l}) \cdot \mathbf{r} = \mu l r^2 \dot{\phi} \quad (13)$$

であるため,

$$A r \cos \alpha = \mu l r^2 \dot{\phi} - \mu k r = l^2 - \mu k r \quad (14)$$

であるため,

$$\frac{1}{r} = \frac{\mu k}{l^2} \left(1 + \frac{A}{\mu k} \cos \alpha \right) \quad (15)$$

が成立する．

第四問

[1]

それぞれ周期境界条件があるため、

$$p_{x,1} = \frac{2\pi\hbar}{L}n_1, \dots \quad (16)$$

のように $p_{x,i}, p_{y,i}$ それぞれに関して周期的境界条件が成立する．つまり運動量空間において、 $\frac{L}{2\pi\hbar}$ 倍をすると量子状態の数が求められるため E よりも小さいエネルギーの量子状態は

$$\Omega(E) = \frac{L^4}{(2\pi\hbar)^4} \cdot (\text{半径}\sqrt{2mE}\text{の 4 次元球の体積}) \quad (17)$$

である．よって、 $E \sim E + dE$ にある量子状態の数は

$$W(E) = \frac{d\Omega(E)}{dE}dE = \frac{L^4}{(2\pi\hbar)^4} \cdot (\text{半径}\sqrt{2mE}\text{の 4 次元球の表面積}) \cdot 2mE \frac{dE}{E} \quad (18)$$

である．よって示せた．

[2]

2 次元球 (円) の体積は図より

$$\int_{-r}^r dq_1 2\sqrt{r^2 - q_1^2} \quad (19)$$

で求まる．ここで、2 次元球の表面積はこの体積を r で微分したものだから

$$S_2(r) = \int_{-r}^r dq_1 \frac{2r}{\sqrt{r^2 - q_1^2}} \quad (20)$$

である．同様にして 3 次元球の体積は $q_1 = x, q_2 = y$ として見立てることによって

$$\int_{-r}^r dq_1 \int_{-\sqrt{r^2 - q_1^2}}^{\sqrt{r^2 - q_1^2}} dq_2 2\sqrt{r^2 - q_1^2 - q_2^2} \quad (21)$$

である．これを r で微分することによって $S_3(r)$ を導ける．同様にして $S_4(r)$ も導ける．

[3]

v_1 を満たす量子状態の個数を W' とすると等確率の原理から

$$P(v_1)dv_1 = \frac{W'}{W(E)} \quad (22)$$

である．ただし今回は規格化をしなくても良いため

$$P(v_1)dv_1 = W' \quad (23)$$

として良い．全体のエネルギーは

$$E = \frac{1}{2}mv_1^2 + E_2 \quad (24)$$

であり、全体の量子状態は E_2 に関してのみ数え上げすればよい．これは全体のエネルギー

$$\epsilon = E - \frac{1}{2}mv_1^2 \quad (25)$$

として 1 粒子の 2 次元状態であるため

$$\Omega'(\epsilon) = \frac{L^2}{(2\pi\hbar)^2} \pi(2m\epsilon) \quad (26)$$

よって,

$$W' = \frac{d\Omega'}{d\epsilon} d\epsilon = (\text{定数}) \cdot (-mv_1) dv_1 \quad (27)$$

である. よって, $P(v_1) = v_1$?